

周知の通りであるが、Tabanan における彼の調査結果は、*American Anthropologist* に掲載された一論文を除いては、未だ公表されていない。本書では、この二つの調査結果が比較される。いずれも独立後、急速に変容しつつある町である。前者では、Bazaar 型経済体制を背景とするイスラム商人 (Peddlers) が、新しい企業体制への移行に主導権を握っているのに対し、後者では、独立後、中央より任命された新しい官吏層のために、政治的エリートとしての地位より転落した旧貴族 (Princes) が、企業経営に乗り出している。両者は夫々、sub-dominant elite としての地位を築きつつあるが、彼らの社会的・文化的背景は目立って異なっている。

Modjokuto のイスラム商人は、地方紳士階層と農民を主体とした伝統社会においては、やや疎外された地位に置かれていた。しかし、彼らの社会では、イスラムを支柱とする禁欲的倫理や個人主義的、普遍主義的世界観が支配的であった。その点、新しい企業づくりの上で、彼らが必要とするものは資本や世界観ではなく、効果的な企業「組織」形成の能力である。これに対し、多分に復古主義的傾向のある Tabanan の旧貴族は、伝統文化のエリートとしての地位を巧みに利用して、旧態の人格関係に基づく古い組織を新しい企業組織に切り替えるのに、余り抵抗を受けていない。唯、古い個別関係主義的献身を土台として築かれた企業組織が、十分な適応力を持ち、能率をあげるように作用しうるか否かに問題が残る。

新しい企業組織を形造る過程が、夫々の社会の伝統の内容の違いによって異なることを、Geertz は詳細に分析する。しかし、このような違いは、無限に異なった形を持つものではなく、そこには一定の規則性が見出されるに違いないという確信に基づいて、彼は最後に六つの興味ある仮説を提示している。

(口羽益生)

Geertz, Clifford (ed.): Old Societies and New States, The Quest for Modernity in Asia and Africa. The Free Press of Glencoe, London. 1963. pp. vii + 303

本書は、シカゴ大学の「新興諸国の比較研究委員会」のメンバーによる最初の論文集である。この委員会は、1959-60年度に作られ、Edward A. Shils を議

長とし、McKim Marriot, David Apter, Clifford Geertz, Lloyd Fallers, Max Rheinstein, Mary Jean Bowman, C. Arnold Anderson, Robert Le Vine によって、運営され、比較を通じて、新興国に共通な社会政治現象の基底に横たわる諸問題を、大学院学生や訪問教授をもまじえたセミナーにおける討議を通じて、社会学的に理解する点に目標を置いている。

本書の副題も示すように、本書の研究対象となる地域は、東南アジアのみに限定されるものではないが、東南アジアにおける新興国に共通な社会的諸問題を比較展望によって理解するために、本書は若干の有益な示唆を与える。しかし、この種の論文集の常として、掲載論文が、必ずしも、総て、一様に所期の目的を充分達成しているとは言い難い。

上記九人の学者によって、夫々取挙げられたテーマは、新興国の比較研究、文化政策、政治的宗教、統合的革新、民主制、法、教育、変動の八つである。より一般的な問題から特殊なものに深化するという方法が採用されている。これらの論文の内、若干のものを紹介するならば、Shils の比較論は、新興国にユニークである共通問題の比較研究の社会学的意味やその視点を取扱っている。新興国にとって共通な問題とは、民族解放という共通な状況における経験より生ずるもので、具体的には、伝統的な農民社会において自国民による近代的行政体の確立とその正当化の政治過程に生ずる問題、近代的経済導入のための国民の説得と教育、知識人と大衆の間に見られる教育的、社会的懸隔、国民の威厳の問題としての伝統と近代教育の融合統一、伝達用具としての言語の統一、文化や経済的利益に絡む地域的対立と国家的統一の問題などである。Marriot の文化政策についての論文も新興諸国の理想主義的傾向を規定する国内的、国際的諸要因を指摘していて、興味深い。例えば、インドにおける仏教の復活は政治的エリートによる国内的統一と国際的威信の獲得のための意識的文化操作と見る。同様の問題をセイロン、パキスタン、インドネシア、アフリカについて検討している。又 Geertz は、新興国の形成過程には、常に、文化的社会的原生主義 (primordialism-tribalism, parochialism, communalism, racism, regionalism などの総称) を打破する統合的革新が見出され、それには幾つかの型がある点を比較によ

て示し、この種の研究が、未開拓の状態におかれ、いまだ十分に理解されない部分が多い点を指摘している。(口羽益生)

Kennedy, R. : Bibliography of Indonesian Peoples and Cultures. Behavior Science Bibliography, Revised edition. 1962. pp. xxii + 207

本書はエール大学並にその附属の Human Relations Area Files によって出版されたインドネシアの民族と文化に対する文献リストである。元来は Raymond Kennedy によって編集せられたものであるが、改訂版は Thomas W. Maretzki 及び H. Th. Fischer 氏の努力に負うところが多い。

この種の書物がエール大学に於て出版されるに至ったのは George P. Murdock の努力に負うところが多く、すでに北米に関する文献が 1941年に Yale Anthropological Studies 第一巻として出版されているが、まことに貴重な努力と感謝する外はない。民族と文化に限ったという点もあって驚嘆すべき充実ぶりである。

編集の仕方もまた用意周到であって、まず Alphabetical Key to Islands, Peoples, Tribal Groups and Tribes の章を設けて部族名、島名等を詳細にあげ、次に雑誌名等の略符をあげる。これが6頁にも及んでいる。いかに雑誌論文などが詳細に調査してあるかが判る。

文献リストはまず Indonesia 全体に関するものをあげ、次に Sumatra, Borneo, Celebes, Java (and Madura), Lesser Sunda Islands, Moluccas に分類してある。

この各項目の中で、例えば Borneo については General, Bahau group, Ngadju group, Land Dyak group, Klamantan-Murut-Kalabit group, Iban (Sea Dyak), Punan group, Coastal Malay Buginese etc., Chinese, Karimata Island に分けて文献をあげており、又その民族の分布図をかかげて誰にもよく判るようにしてある。

このような文献集ができ上るためには国際的な協力がなされており、例えば Cornell 大学の J. Echols, G. McT. Kahin, Library of Congress の C. Hobbs など国内の専門家はいうまでもなく、ライデンの Museum van Volkenkunde の J.P.B. de Josselin

de Jong, R. E. Downs, アムステルダムの Tropical Institute の M. W. Reyers, ユトレヒト大学の J. Gond, A. Teeuw, ジャカルタ大学の G. J. Held 氏などその一部である。

このようなリストが出来るについての協力者の組織などについても教えられるところが多い。

(棚瀬裏爾)

Государственное издательство иностранных и национальных словарей: Индонезийско-Русский Словарь. Москва, 1961, pp. 1171

An Indonesian-English Dictionary. Cornell University Press, Ithaca. Second edition 1963. pp. xviii + 431

最近、ソ、米からインドネシア語辞典の大冊が出た。前者は R. N. Korigodosky 他四人の編集で収容語数は45000とする。後者は J. M. Echols と H. Shadily の手に代るもので概算20000の見出し語数。語数は後者の方が少ないが序文にもある通り、現代の文献を読むに必要なものに制限したせいであろう。前者は古代の文学をも読解し得る語をも入れたとあり、又、民俗、習俗、生物語彙もこの方がずっと多い。後者は語彙は少ないが、各語の文例が相当詳しく出ている。辞書の生命は単に意味の対応訳を掲げるのではなく、いかにその語の適当な文例、使用例が出ているかにある。この点で後者は前者に優る(もっとも、完全という訳ではないが)。後者によって、所謂、辞書を読むこともできる。インドネシア語の特徴は語根語に接頭、接尾辞が付いて更に一つの単語が形成されることにある。語根語に接続可能な凡ての接辞を網羅的に示し、その用例をも掲げた辞書をもって最も完璧なものといえるのである。この両書には出ていないが、Saja be-rumah dikampung ini. <私はこの村に家(を)持つ。rumah=家>のような用例を示していたらきりが無いが、この点で両書は氷山の一角を載せているにすぎず、従来の辞書の域を全く脱していないといえよう。実際の言語の機能の状態はこの両書によってもまだまだ知り得ない。そのような意味での甘さがあることは充分念頭に置く必要がある。

次に音声、表記の説明であるが、ソの方はまだまだ米の構造主義言語学の風が吹き込んでいないらしく(私見では、全く興味を持っていないといえる)、旧来